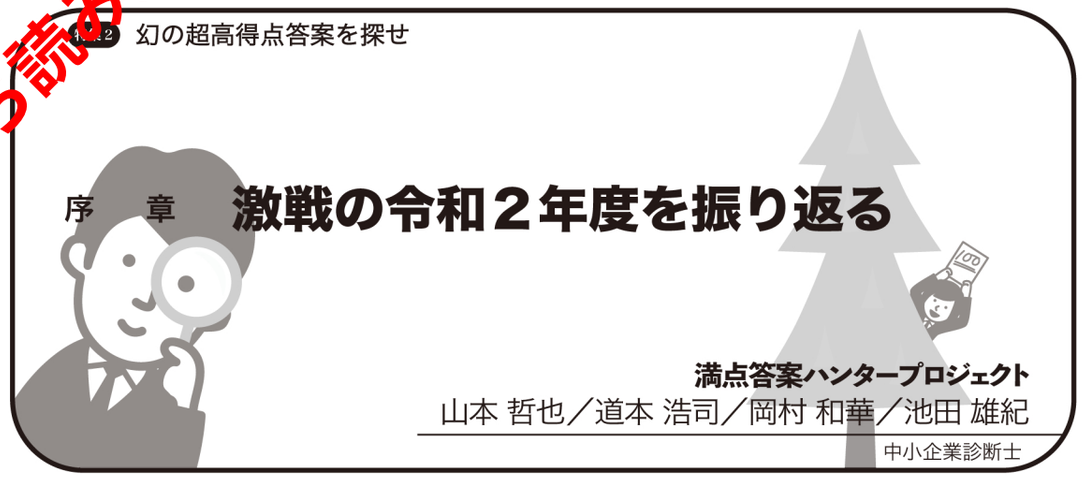
立ち読み版



序　章　激戦の令和２年度を振り返る

満点答案ハンタープロジェクト
山本 哲也／道本 浩司／岡村 和華／池田 雄紀
中小企業診断士

山本 哲也

本特集の企画・監修担当。初代満点ハンターリーダー。企業内診断士。平成30年度，２次試験合格。専門分野は，営業・マーケティングと新規事業開発。

道本 浩司

本特集の事例Ⅰ，Ⅳ担当。２代目満点ハンター。企業内診断士。令和元年度，２次試験合格。普段は，都市間交通の管理職として奮闘中。

岡村 和華

本特集の事例Ⅱ担当。２代目満点ハンター。独立診断士。令和元年度，２次試験合格。個性と魅力の可視化がモットー。

池田 雄紀

本特集の事例Ⅲ担当。２代目満点ハンター。企業内診断士。令和元年度，２次試験合格。診断士の副業が楽しくて仕方ない。

1 またもや一本の電話から始まった

今やSNS全盛時代。しかし，残念ながら私のスマートフォンは，目覚まし機能以外でめったに鳴ることはない。が，その日，普段は鳴らずのスマートフォンが，久々に鳴り響いた。

「企業診断編集部の●●と申しますが，中小企業診断士２次試験の件で――」

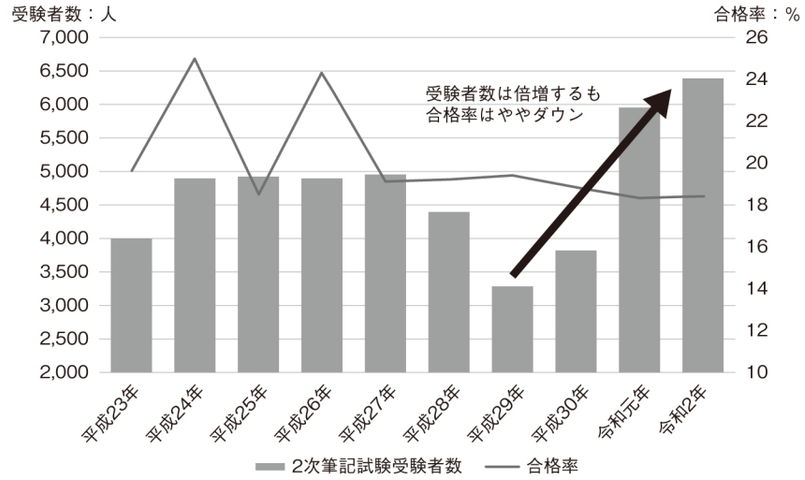
聞き覚えのある男の声だった。

とっさに「満点合格者の件だ」と気づいた。昨年，本誌４月号の特集企画として，全国から２次試験の超高得点者を探し出し，その再現答案を分析するとともに，学習や解答テクニックなど，合格のヒントを研究報告する執筆を，私たち診断士チームで引き受けたのだった。

紆余曲折の末，無事に「満点答案」を探し出すことができた（満点答案に興味のある方は，本誌2020年４月号をご一読いただきたい。現在も好評販売中だ）。しかし，それにしても，全国から幻の「満点答案」を探し出す作業は正直，シンドかった。申し訳ないが，今回は断ろう。

「もしもし，私たちの辞書にも不可能という文字が書き加えられました。申し訳ないが，今回は引き受けられ――」

図表　２次筆記試験受験者数と合格率の推移



その男は，私の言葉を遮るように，電話口で淡々と続けた。

「この間，大阪に行った際に●●先生が××で△△という話を耳にしたのですが――。本当でしょうか？」

私はメンバーへ相談することもなく，喜んで執筆を引き受けたのだった。

2 大混乱の中の令和２年度２次試験

現在の試験制度が始まった平成13年度以来，最大の受験者数だった。例年，合格者数は1,000人前後と安定して推移しているため，受験者数が増えれば増えるだけ，その合格率が低下することは容易に想像がつく。つまり，過去最大の激戦だったのだ。

合格率は18.4％と，過去２番目の低さという厳しい結果となった。また，コロナ禍の影響も大きく，特別措置として受験を翌年に持ち越す選択肢も与えられた。

「受験者数も多いし，翌年まで学習したほうがよいのでしょうか？」

そういった相談が我々にもたくさん寄せられた。

蓋を開けてみれば，結果的に700人ほどが受験しておらず，翌年に権利を持ち越したとみられる。つまり，本年の２次筆記試験も激戦となることが予想されるのだ。

3 そして指令は発せられた――

２次試験は，得点積み上げや減点法による絶対評価ではなく，上位２割程度の受験生について，総得点の60％以上を獲得したとして合格させる相対評価だ（と，我々は断定している）。

その相対評価の下，受験生のためとはいえ，令和２年度限定で満点答案を探し出すなんて至難の業。満点答案ハンターのメンバーからの反発は必至だ。が，後悔は後の祭り。安請け合いをしてしまったものはしょうがない。

しかし，激戦の令和２年度２次試験，そもそも，満点答案はおろか，超高得点答案すら見つかるのだろうか？

「我々の辞書から不可能の文字は消えた，皆，頑張って探して！」

私は詫びるような気持ちで，満点答案ハンターのメンバーにメールを一斉送信したのだった。

⇒続きは雑誌で